

## 楚辞「九歎」訳注(一)

榑原 慎二・岡本 光平・木村 真理子・矢田 尚子  
漢代楚辞作品研究会

### はじめに

小稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)18K00348「漢代楚辞作品の多角的研究—文学・思想・文化研究資料としての再評価をめざして—」における研究成果の一部である。本研究の主要メンバーは、上原尉暢(研究協力者)・狩野雄(研究分担者)・塚本信也(研究分担者)・矢田尚子(研究代表者)の四名である。なお、本研究の目的については、矢田尚子「楚辞「惜誓」訳注」(『東北大学中国語学文学論集』第26号、2021年12月)51~52頁を参照されたい。

小稿には、楚辞「九歎」逢紛の訳注を収めている。訳注は、研究協力者である榑原・岡本・木村の三名が共同で作成し、矢田が最終調整をおこなった。また、その原稿は、上記の研究主要メンバーによる検討を経ている。今後、他の「九歎」作品の訳注も、同様の手法により発表される予定である。

以下に訳注についての凡例を掲げる。

### 凡例

○底本には洪興祖撰、白化文等点校『楚辞補注』(中華書局、2017年)を用い、四部叢刊本『楚辞補注』及び明万曆十四年馮紹祖刊本王逸『楚辞章句』(芸文印書館、1974年)を参照した。その他、経書は『十三経注疏附校勘記』(芸文印書館、1955年)に、『説文解字』は段玉裁『説文解字注』(中華書局、2013年)に、正史は『百衲本二十四史』に拠った。また諸子の書は『新編諸子集成』に、『文選』は胡克家本(芸文印書館、1998年)に拠り、『四部叢刊』本および『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』(人民文学出版社、2008年)を参照した。その他の書物を引用する際は特に断りのない限り『四部叢刊』所収のものを用いた。

○押韻は羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』（中華書局、2013年）に基づき、双声・疊韻語については王力主編『王力古漢語字典』（中華書局、2000年）および郭錫良編著『漢字古音手冊』（商務印書館、2010年）を参照した。

○作品本文とその書き下し文は、太字で示して句ごとに番号を振り、現代日本語訳と注釈を付けた。なお、紙幅に限りがあるため、解題と王逸注には書き下し文を付けず、現代日本語訳のみとした。

### 〔解題〕

**九歎者、護左都水使者光祿大夫劉向之所作也。向以博古敏達、典校經書、辯章舊文、追念屈原忠信之節、故作九歎。歎者、傷也。息也。言屈原放在山澤、猶傷念君、歎息無已。所謂讚賢以輔志、騁詞以曜德者也。**

〔通釈〕「九歎」とは、護左都水使者光祿大夫の劉向が作ったものである。劉向はいにしへのことに広く通じて頭の回転が速く正確であったため、經書を校訂し、古い書物を整理して内容を明らかにし、屈原の忠信の節に思いを致し、ゆえに「九歎」を作った。歎とは、心を痛め、ため息をつくことである。言っているのは屈原が山や水辺に放逐され、それでもなお心を痛めて主君を思い、嘆息は止むことがなかったということである。賢人を称えてその考えを支持し、言葉を駆使してその徳を顕彰したものである。

**護左都水使者** 京畿の灌漑を司る官職。『漢書』楚元王伝附劉向伝（卷三十六）に「成帝即位、顯等伏辜、更生乃復進用、更名向。向以故九卿召拜爲中郎、使領護三輔都水。數奏封事、遷光祿大夫」とある。『後漢書』循吏伝、王景伝（卷一百六）に「明年夏、渠成。帝親自巡行、詔濱河郡國置河堤員吏、如西京舊制」とあり、李賢注に引く北魏・闕駟『十三州志』に「成帝時河堤大壞、汎濫青・徐・兗・豫四州略徧、乃以校尉王延代領河堤謁者、秩千石、或名其官爲護都水使者」とある。

**光祿大夫** 秦から前漢武帝期以前の郎中令にあたり、宮殿の正門の左右にある門を司る。武帝の頃に光祿勳と改称され、属官のうち中大夫がのちに光祿大夫となった。『漢書』百官公卿表（卷十九上）に「郎中令、秦官。掌宮殿掖門戶、有丞。武帝太初元年更名光祿勳。属官有大夫・郎・謁者、皆秦官。又期門・羽林皆屬焉。大夫掌論議、有太中大夫・中大夫・諫大夫、皆無員、多至數十人。……太初元年更名中大夫爲光祿大夫、秩比二千石」とある。

**典校經書** 經書を校訂すること。『漢書』成帝紀（卷十）に「（河平三年秋八月）光祿大夫劉向校中祕書」とある。芸文志（卷三十）大序にも「詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦」とある。なお、劉向と『楚辭』との関係を示す資料は『楚辭章句』「離騷」後叙の「逮至劉向、典校經書、分爲十六卷」という記述のみである。

**辯章舊文** 古い書物を校訂すること。班固「答賓戲」（『漢書』卷一百、敘伝上）に「近者、陸子優繇、新語以興、董生下帷、發藻儒林、劉向司籍、辯章舊聞、揚雄覃思、法言・太玄」とある。

**歎、傷也、息也** 『広雅』積詁（卷二下）に「悲・悠・悼・怒・悴・愁・愍・感・痛・嘆・殤、傷也」とある。また同書・積詁（卷二上）の「嗟嘆、呻吟也」に対し、王念孫『広雅疏証』は『礼記』檀弓「戚斯歎」の鄭玄注に「歎、吟息」とあるのを引き「歎與嘆同」とする（『爾雅・廣雅・方言・釋名 清疏四種合刊』上海古籍出版社、1989年）。

### 「逢紛」

[題解] 屈原が災難に直面したことをいったもの。「九歎」愍命に「懷椒聊之葢葢兮、乃逢紛以罹詬也」とあり、王逸注には「言己懷持椒聊、其香葢葢、身修行潔、動有節度、而逢亂世、遂爲讒佞所害而見恥辱也」とある。揚雄「反離騷」（『漢書』卷八十七、揚雄伝上）に「惟天軌之不辟兮、何純絜而離紛」とあり、顔師古は「離、遭也。紛、難也」と注している。

### 1 伊伯庸之末胄兮 伊れ伯庸の末胄にして

伯庸の末裔であり、

[王逸注] 胄、後也。左氏傳曰、戎子駒支、四嶽之裔胄也（胄とは、子孫のことである。『左伝』（襄公十四年）にいう、「異民族の首長である駒支は、四嶽の官の遠い子孫である」と）。

**伊** 発語の助字。『爾雅』積詁下の「伊、維也」に郭璞が「發語辭」と注している。また王泗原『楚辞校釈』（人民教育出版社、1990年、393頁）は逢紛当該句の「伊」を「句首助詞」とする。

**伯庸** 楚辞「離騷」では、作中主体である「靈均」の父として言及される。「離騷」の冒頭二句「帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸」の王逸注に「伯庸、字也。屈原言我父伯庸、體有美德、以忠輔楚、世有令名、以及於己」とある。逢紛では、伯庸が屈原の父とされており、「離騷」の王逸注と同様に「靈均」を屈原とみなす解釈が反映されている。

### 2 諒皇直之屈原 まこと 諒に皇直の屈原なり

まことにすばらしく忠直な屈原である。

[王逸注] 諒、信也。論語曰、君子貞而不諒。言屈原承伯庸之後、信有忠直美德、甚於衆人也（諒とは、まことである。『論語』にいう、「君子は行いを正すが些細な信義を重んじるわけではない」と。言っているのは、屈原が伯庸の後を継いで、まことに忠直の美德があつて、衆人よりまさっているということである）。

諒 「まことに」の意。楚辞作品には「九章」惜往日の「諒不聰明而蔽壅兮、使讒諛而日得」や「九弁」の「諒城郭之不足恃兮、雖重介之何益」など、句頭に「諒」字を用いる例がある。王逸が引いているのは『論語』衛靈公篇の「子曰、君子貞而不諒」であるが、孔安国注に「貞、正。諒、信也。君子之人正其道耳。言不必小信」とあることに鑑みれば、「諒」は「小信」という否定的な意味で用いられていることになり、逢紛の当該句「諒」の意味にはそぐわない。

3 云余肇祖于高陽兮 云えらく余肇<sup>はじ</sup>めて高陽を祖とし

4 惟楚懷之嬋連 惟れ楚懷の嬋連なり

(屈原が)言うには、私は高陽氏(顓頊)を祖先に持ち、楚の懷王と同族である。

[王逸注]嬋連、族親也。言屈原與懷王俱顓頊之孫、有嬋連之族親、恩深而義篤也(嬋連とは、親族のことである。言っているのは、屈原が懷王と同じく帝顓頊の子孫であり、親族としてのつながりがあるので、恩義が深く厚いということである)。

[押韻]原・連。元部平声。

云「いう」の意。D. ホークス *Ch'u Tz'ü the songs of the South an ancient chinese anthology*, Oxford University Press, 1959. が “Thus speaks the last scion of Po Yung' s line” と訳しているのは(152頁)、「云」を“speak”すなわち「いう」の意として解したためであろう。湯炳正等『楚辞今注』(上海古籍出版社、1996年、333頁)も「以引語方式代屈原自指」とする。ここではこれらの見解に従う。なお屈原の発話は以下の部分に続く。

肇「はじめて」の意。楚王の家系が顓頊にはじまることをいう。「離騷」に「皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名」と、王逸注に「肇、始也」とある。

高陽 帝顓頊のこと。「離騷」冒頭句「帝高陽之苗裔兮」の王逸注に「高陽、顓頊有天下之號也」とある。

嬋連 血筋が連綿とつらなっているさま。洪興祖補注は「嬋連、猶牽連也」とする。「離騷」に「女嬃之嬋媛兮」とあり、王逸注に「嬋媛、猶牽引也」とある。揚雄「反離騷」(『漢書』卷八十七、揚雄伝上)「有周氏之嬋媯兮、或鼻祖於汾隅」の應劭注に「嬋媯、連也。言與周氏親連也」とある。屈原が楚の懷王と同族であったことは『史記』屈原伝(卷八十四)に「屈原者、名平。楚之同姓也。爲楚懷王左徒」という形で記されている。楚の王族であった子瑕が屈の地を与えられ、その地名を氏としたのが屈氏のはじまりであるという。「離騷」冒頭句「帝高陽之苗裔兮」の注に「帝繫曰」として引かれる『世本』(佚書)に「顓頊娶于騰隍氏女而生老僮、是爲楚先。……其孫武王求尊爵於周、周不與、遂僭號稱王。始都於郢、是時生子瑕、受屈爲客卿、因以爲氏」とある。

5 原生受命于貞節兮 原 生まれて命を受けること貞節

6 鴻永路有嘉名 鴻永の路 嘉名 有り

私は生まれながらに正しい節操を備え、  
大いなる長き道に名声を響かせる。

[王逸注]鴻、大也。永、長也。路、道也。言屈原受陰陽之正氣、體合大道。故長有美善之名也（鴻とは、大きいこと。永とは、長いこと。路とは、道をいう。言っているのは、屈原は陰陽の正しい気を受けたので、その身体は大いなる道と一体となっている。だからこそ長く美しく善い名声を保ったということである）。

受命于貞節 生まれながらに正しい節操を備えていたということ。『楚辞今注』には「貞節：即「正節」，指節令之正。屈原生於歲星十二年一個「恆星周期」的第一年正月一日，古人認爲是難得的吉日，因有此說」とあり（333頁）、貞節を「正しい時節」と解釈している。この説は「離騷」の「攝提貞於孟陬兮、惟庚寅吾以降」に基づくと考えられるが、表現が異なっているため、必ずしも「離騷」の文脈に則して解釈する必要はないと思われる。また、張衡「思玄賦」（『文選』巻十五）に「伊中情之信脩兮、慕古人之貞節」とあり、李善注は逢紛の当該句を引いているため、少なくとも李善は「節」を「時節」として理解していないことが窺える。そのため、ここでは「正しい節操」と解した。

鴻永路 この語が指し示すところはよくわからない。王逸注では「路」を「道」としており、「體合大道」と解釈している。D.ホークスは「鴻永路」を“my life's long road”と訳している（152頁）。ここでは長大な道として解した。

嘉名 名声。「離騷」に「皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名」とあるため、「離騷」の表現を踏襲していることが窺える。

7 齊名字於天地兮 名字は天地に齊しく

その名と字とは天地に等しいほどであり、

[王逸注]謂名平、字原也（言っているのは、屈原の名は平、字は原であるということである）。

8 竝光明於列星 光明は列星に並ぶ

その光明は星々に並ぶほどであった。

[王逸注]謂心達道要、又文采光耀、若天有列星也（言っているのは、その心は道の大要に通達し、またその文章は光り輝いており、さながら天に星々があるかのようなものであるということである）。

[押韻]名・星。耕部平声。

### 9 吸精粹而吐氣濁兮 精の粹なるを吸いて氣の濁なるを吐き

氣の清潔なものを吸って汚濁したものを吐き、

[王逸注]氣、惡氣也。左氏傳曰、楚氣甚惡。言己吸天地清明之氣、而吐其塵濁、內潔淨也（氣とは、悪い氣のことである。『左伝』（襄公二十七年）にいう、「楚の氣配はとても不吉である」と。言っているのは、自分が天地の清く明るい氣を吸って、汚れて濁った氣を吐き、体内が清潔であるということである）。

**精粹** 精は氣のこと。粹は清潔なさま。張衡「思玄賦」（『後漢書』卷五十九、張衡伝および『文選』卷十五）に「欸神化而蟬蛻兮、朋**精粹**而爲徒」とあり、李賢は「粹、美也」と注している。李善注は逢紛の当該句を引く。

**氣濁** 氣は、ここでは悪い氣のこと。『説文解字』气部に「氣、祥氣也」とあり、段玉裁『説文解字注』は「謂吉凶先見之氣」として『春秋左氏伝』の昭公十五年の伝「非祭祥也。喪氣也」と杜預注「氣、惡氣也」、また『国語』晋語一の「見翟祖之氣」と韋昭注「氣、禳氣。凶象也。凶曰氣、吉曰祥」を引き、「統言則祥・氣二字皆兼吉凶、析言則祥吉氣凶耳。許意是統言。左傳又曰、「楚氣甚惡。」杜注「氣、氣也。」可見不容分別」という。また楚辞「遠遊」に「絶氛埃而淑郵兮、終不反其故都」とあり、王逸注には「超越垢穢、過先祖也」とあるほか、楚辞「九思」守志に「彼日月兮闇昧、障覆天兮禳氣」とあり、その注に「禳、惡氣貌」とある。

### 10 横邪世而不取容 邪世を横ぎて取容せず

邪よこしまな世に抵抗して（私はそのような世には）取り入らない。

[王逸注]言己體清潔之行、在横邪貪枉之世、而不能自容入于衆也（言っているのは、自分は清廉な行いを体得しているが、邪よこしまで曲がった世におり、進んで衆人に受け入れられようとする事ができないということである）。

**横邪世** 横は、防ぐこと。『楚辞今注』は「九章」橘頌の「横而不流兮」について『説文解字』木部の「横、闌木也」を根拠に、「横」字を「即闌杆、所以防閑内外。比喻立德矜持、深自約束」と解している（169頁）。王逸は橘頌の当該句に「言屈原自知爲讒佞所害、心中覺寤、然不可變節、猶行忠直、横立自持、不隨俗人也」と注している。段玉裁『説文解字注』は「横」について「闌、門遮也。引伸爲凡遮之僞」とする。ここではこれに従って解釈する。「邪世」は乱れた世のこと。『孟子』尽心下篇に「孟子曰、周于利者、凶年不能殺。周于德者、邪世不能亂」とあり、趙岐注に「周達於德、身欲行之。雖遭邪世、不能亂其志也」とある。

**取容** 人に取り入ろうとすること。『史記』張積之伝（卷一百二）に「以不能取容當世、故終身不仕」とあり、『史記索隱』は「謂性公直、不能曲屈見容於當世、故至免官不仕也」とする。同書の平準書（卷三十）にも「自是之後、有腹誅之法以比、而公卿大夫多諂諛取容矣」とある。

### 11 行叩誠而不阿兮 行い 叩誠にして阿らざれば

（私の）行いは誠実で（他人に）おもねらないため、

[王逸注]叩、撃。阿、曲也（叩とは、撃つことである。阿とは、曲がることである）。

**叩誠** まごころがあるさま。王逸注には「叩、撃也」とあるが、ここでは従わない。王念孫『讀書雜誌』余編（虞思徵点校、上海古籍出版社、2015年、2661頁）に「今案、叩誠、猶言款誠。廣雅曰、「款、誠也。」款與叩一聲之轉。款誠之爲叩誠、猶叩門之爲款門也。重言之則曰叩叩。繁欽定情詩曰、「何以致叩叩、香囊繫肘後。」」とある。また『広雅』積訓（卷六上）に「控控・慤慤・懇懇・叩叩・斷斷、誠也」とあり、王念孫疏証は逢紛の当該句を引いて「叩、亦誠也。王逸注訓叩爲撃、失之」とする。「欵（款）誠」については、『漢書』匈奴伝（卷九十四下）に「今、單于歸義、懷欵誠之心、欲離其庭、陳見於前」と、王莽伝（卷九十九上）に「四海奔走、百蠻並轅、辭去之日、莫不隕涕、非有欵誠。豈可虚致」とある。

### 12 遂見排而逢讒 遂に排せられて讒に逢う

とうとう排斥されて讒言を受けたのだ。

[王逸注]言己心不容非、以好叩撃人之過、故遂爲讒佞所排逐也（言っているのは、自分の心がよこしま邪な在り方を受け入れず、人の過ちを弾劾することを好むため、讒言を行う佞臣らによって排斥され放逐されたということである）。

[押韻]容・讒。談東合韻。

### 13 后聽虚而黜實兮 后 虚を聴きて実を黜け

君主は虚偽を聞き入れて真実を退け、

[王逸注]黜、貶也。實、誠也（黜とは、退けることである。実とは、誠であることである）。

**后** 君主のこと。『説文解字』后部には「后、繼體君也」とあり、特に先代を継いだ君主のこととするが、段玉裁『説文解字注』は「釋詁・毛傳皆曰「后、君也。」許知爲繼體君者、后之言後也。開創之君在先、繼體之君在後也。析言之如是。渾言之則不別矣」と注し、君主一般のこととする。

### 14 不吾理而順情 吾を理めずして情に順う

私をないがしろにして感情のままに振る舞った。

[王逸注]言君聽讒佞虛言、以貶忠誠之實、不理我言而順邪僞之情。故見放流也（言っているのは、君主は奸臣の虚言を聞き入れ、それによって忠誠の真心を退け、私の言葉を聞き入れず、邪悪で間違っている情に従った。そのために(私が)放逐されたということである）。

順情 天与の性情に従うこと。ここでは負の意味を帯びる。後代の用例であるが、『論衡』非韓篇に「下愚無禮、順情從欲、與鳥獸同」とあり、『後漢書』荀爽伝（卷六十二）に「人能枉欲從禮者、則福歸之。順情廢禮者、則禍歸之」とある。

15 腸憤悁而含怒兮 腸 憤悁して怒を含み

16 志遷蹇而左傾 志 遷蹇して左に傾く

はらわた  
腸 は沸々と怒りを抱き、  
思いは移ろい乱れて平静を欠く。

[王逸注]言己執忠誠而見貶黜、腸中憤懣、悁悁而怒、則志意遷移、左傾而去也（言っているのは、自分は忠誠を抱いていたが退けられ、腸は憤りに満ち、沸々と怒ることで、思いは移ろい、左に傾いて消え去ったということである）。

[押韻]情・傾。耕部平声。

憤悁・含怒 憤悁は憤ること。含怒は怒りを抱くこと。『戦国策』趙策二に「秦雖辟遠、然而心忿悁含怒之日久矣」とある。

遷蹇 うつろうこと。晷韻語。逢紛の当該句に対する洪興祖補注に「一云、志徙倚而左傾」とある。「遷蹇」の用例はないが、「徙倚」は『淮南子』俶真訓に「至徳之世、甘暝於溷濁之域、而徙倚於汗漫之宇」とある。

左傾 心の平静を欠くこと。蔡邕「檢逸賦」（『芸文類聚』卷十八、中文出版社、1972年）に「情罔象而無主、意徙倚而左傾」とある。

17 心儻慌其不我與兮 心 儻慌として其れ我と与にせず

心は憂いに沈んで私から離れてしまっているかのようであり、

[王逸注]儻慌、無思慮貌（儻慌とは、思慮がないさまである）。

儻慌 憂愁に沈むこと。晷韻語。洪興祖補注に「儻慌、失意」とある。「九歎」遠逝に「横舟航而滄湘兮、耳聊啾而儻慌」とあり、王逸はここでは「聊啾、耳鳴也。儻慌、憂愁也。言己願乘舟航濟渡湘水、寂無人聲、耳中聊啾而自鳴、意中憂愁而儻慌、無所依歸也」と注している。ここでは、こちらの王逸注に従って訳す。



## 18 躬速速其不吾親

躬 速速として其れ吾に親しからず

身体もおどおどとして私自身のものでないかのようだ。

[王逸注]速速、不親附貌也。言君心儻慌而無思慮、不肯與我謀議、用志速速、不與己相親附也（速速とは、親しまないさまである。言っているのは、主君の心に思慮がなく、私とはかりごとについて話し合おうとせず、（私に対する）心の動きがよそよそしく、私と親しまないということである）。

**速速** 縮こまっているさま。『爾雅』積訓に「速速、蹙蹙。惟速鞠也」とあり、郭璞注に「陋人專祿、國侵削、賢士永哀念窮迫」とある。また『毛詩』小雅・節南山に「我瞻四方、蹙蹙靡所聘」とあり、鄭箋には「蹙蹙、縮小之貌」とある。郝懿行『爾雅義疏』は逢紛の当該句および王逸注を引き、「然則速速與蹙蹙皆爲褊急之意。故毛傳以蔌蔌爲陋。詩節南山箋、「蹙蹙、縮小之貌。」士相見禮注、「蹙、猶促也。」郭注以國侵削爲蹙、於義亦通」とする（『爾雅・廣雅・方言・釋名 清疏四種合刊』上海古籍出版社、1989年）。

**心・躬** 作中主体の心と身を指す。『楚辭今注』は13～18を「以上六句寫君主對己之態度」と解しており（334頁）、その他の注釈書も特に17・18は懷王のことをいうとする。しかし15から続く「腸（志・心・躬）〇〇而／其△△」という表現は「九歎」に頻出し、全て作中主体の心情をいつている。たとえば遠逝の「志隱隱而鬱怫兮、愁獨哀而冤結。腸紛紜以繚轉兮、涕漸漸其若屑。情慨慨而長懷兮、信上皇而質正」など。

## 19 辭靈修而隕志兮

靈修と辞れて志を隕とし

主君と決別したことで気を落し、

[王逸注]隕、墮也。易曰、有隕自天也（隕とは、墮とすことである。『易』（姤卦・九五）にいう、「落とすようなことがあるとすればそれは天によるものだろう」と）。

**靈修** 屈原の主君であった楚の懷王を指す。「九歎」思古に「興離騷之微文兮、冀靈修之壹悟」とある。思古の表現に関連して、『史記』屈原伝（卷八十四）に「屈平既嫉之、雖放流、睠顧楚國、繫心懷王、不忘欲反、冀幸君之一悟、俗之一改也」とある。

## 20 吟澤畔之江濱

沢畔と江浜とに吟ず

（私は）湿地のそばや川のほとりで吟詠している。

[王逸注]畔、界也。濱、涯也。言己與懷王辭訣、志意墮落、長吟江澤之涯而已（畔とは、へりのことである。浜とは、ほとりのことである。言っているのは、自分が懷王と決別し、心が落ち込んで、川や湿地の近くで声を長く伸ばし吟詠するしかないということである）。

[押韻]親・濱。真部平声。

吟澤畔之江濱 放逐された屈原が湿地や川のほとりで行吟している様子。楚辞「漁父」に「屈原既放、游於江潭、行吟澤畔、顔色憔悴、形容枯槁」とある。『史記』屈原伝（巻八十四）にも「漁父」とほぼ同じ「屈原至於江濱、被髮行吟澤畔」という記述がある。「之」字については、徐仁甫『古詩別解』（上海古籍出版社、1984年、58頁）が「九歎」愍命に「放佞人與諂諛兮、斥讒夫與便嬖。親忠正之悃誠兮、招貞良與明智」とあることを挙げ、「與」字と同じ意味として解釈している。また、洪興祖はこの「親忠正」句について「之、一作與」と述べている。ここではこの説に従う。

## 21 椒桂羅呂顛覆兮 椒桂羅なるも以て顛覆するも

椒や桂のような（素晴らしい人々は）居並んでいたが、転倒させられても、  
[王逸注]顛、頓也。覆、仆也（顛とは、つまづくことである。覆とは、倒れることである）。  
椒・桂 いずれも香木。「離騷」に「昔三后之純粹兮、固衆芳之所在。雜申椒與菌桂兮、豈維初夫蕙蒞」とあり、王逸注に「申、重也。椒、香木也。其芳小重之以香。菌、薰也。葉曰蕙。根曰薰」とある。22の王逸注では、先賢を表しているという。顔延之「陶徵士誄」（『文選』巻五十七）の「桂椒信芳而非園林之實」に付された李善注が『春秋運斗樞』の「椒桂連、名士起」を引くことから、椒・桂は優れた人物と関係するものとして捉えられていたと考えられる。羅 連なること。『楚辞校釈』には「羅，列，駢」とあり（395頁）、『楚辞今注』では「羅：陳列」としている（334頁）。楚辞「招魂」に「步騎羅些」とあり、王逸注に「羅、列也」とある。

## 22 有竭信而歸誠 信を竭くして誠を帰すること有り

忠信を尽くして誠意を寄せた。

[王逸注]言己見先賢若椒桂之人以被禍、其身顛仆、然猶竭信歸誠而志不懼也（言っているのは、昔の賢者で椒や桂のような人々が禍を被り、その身が転倒させられるのを見ても、自分はおお君主に忠信を尽くして誠心を寄せ、心で恐れなかったということである）。

有 動詞の前に置く、特に意味を持たない助詞。『古詩別解』では「“有”犹“犹”也、王注以“犹”代“有”，明“有”有“犹”义。盖“有”古同“又”，“又”犹“犹”」とし（58頁）、「猶」の意味であるとするが、楚辞作品には他に用例がないため、従わない。

歸誠 誠意を寄せること。『漢書』佞幸伝、石頭伝（巻九十三）に「顯内自知擅權事柄在掌握、恐天子一旦納用左右耳目、有以間己、乃時歸誠、取一信以爲驗」とあり、揚雄「答劉歆書」（『古文苑』巻十）に「謹歸誠底裏、不敢違信」とある。

### 23 讒夫藹藹而漫著兮 讒夫 藹藹として漫著すれば

讒言をする者が数多く(私を)汚すのだから、

[王逸注]藹藹、盛多貌也。詩云、藹藹王多吉士。漫、汚也(藹藹とは、盛んで多いさまである。『詩』に「王の側には賢人が藹藹と多く集まっている」とある。漫とは、汚れである)。

讒夫 讒言を行う者たち。『荀子』成相篇に「讒夫多進、反覆言語生詐態」とあり、「九歎」離世に「讒夫黨旅、其以茲故兮」とある。

藹藹 数多く盛んなさま。『毛詩』大雅・卷阿に「藹藹王多吉士、維君子使、媚于天子」とあり、毛伝には「藹藹、猶濟濟也」とある。「濟濟」については、『毛詩』大雅・旱麓に「瞻彼旱麓、榛楛濟濟」とあり、毛伝に「濟濟、衆多也」とある。

漫著 漫は汚れ。著は付着すること。『楚辞校釈』は「漫,莫半切(換韻),水漫的漫。著,直略切(藥韻),著體的著。言漫著君之心」として、讒言をする者が君主の心に汚れを付着させることだとする(395頁)。郭在貽『訓詁叢稿』「《楚辞》解詁」(中華書局、2002年、22頁)は、まず『莊子』徐無鬼篇の「郢人堊慢其鼻端、若蠅翼、使匠石斷之」に対する成玄英の疏「漫、汚也」を引き、「慢」と「漫」はともに「汚穢」を意味するという。次に「著」については、揚雄「解難」(『漢書』卷八十七、揚雄伝下)の「瘠人亡、則匠石輟斤、而不敢妄斷」に付された服虔注「瘠人、古之善塗堊者、施廣領大袖以仰塗、而領袖不汚。有小飛泥誤著其鼻、因令匠石揮斤而斷之」を引き、「付着する」という意味であるとする。そして「漫著」は、作中主体が讒言を受けることを表すという。下文との繋がりに鑑み、ここでは郭氏の説に従う。

### 24 曷其不舒予情 曷ぞ其れ予が情を舒べざる

どうして私の心情を述べないでいられようか。

[王逸注]曷、何也。言讒人相聚、藹藹而盛。欲漫汚人、以自著明。君何不舒我忠情、以詰責之乎(曷とは、何である。言っているのは、人に讒言をする人々は集まりあって、数多く盛んである。人を汚して、自らを有名にしようとする。君主はどうして私の忠情を述べて、讒言をする人々を叱責しないのか、ということである)。

[押韻]誠・情。耕部平声。

舒予情 自らの心情を述べること。王逸注は「舒」の主語を君主とするが、「九章」惜往日に「焉舒情而抽信兮、恬死亡而不聊」と、「遠遊」に「誰可與玩斯遺芳兮、晨向風而舒情」と、「九歎」怨思に「乘騏驎、舒吾情兮」とあり、いずれの例においても「舒」は作中主体の動作である。

### 25 始結言於廟堂兮 始め言を廟堂に結ぶも

(王は)はじめに朝廷で約束なさっておきながら、

[王逸注] 結、猶聯也。廟者、先祖所居也。言人君爲政舉事、必告於宗廟、議之於明堂（結とは、つなぐというようなことである。廟とは、先祖のいる場所である。言っているのは、君主がまつりごとを行う際は、必ず宗廟に告げ、これを明堂で話し合うということである）。

結言 約束すること。「離騷」に「解佩纒以結言兮、吾令蹇脩以爲理」とあり、王逸注には「言己既見宓妃、則解我佩帶之玉、以結言語、使古賢蹇脩而爲媒理也」とある。

廟堂 宗廟と明堂。転じて朝廷を指す。『莊子』在宥篇に「故賢者伏處大山崐崘之下、而萬乘之君憂慄乎廟堂之上」とある。

## 26 信中塗而叛之 信に中途にして之れに叛す

途中でそれを反故になされた。

[王逸注] 塗、道也。叛、背也。言君始嘗與己結議、連謀於明堂之上、今信用讒言、中道而更背我也（塗は、道である。叛は、背くことである。言っているのは、君ははじめ私と議論し、はかりごとを朝廷で巡らしたが、今になって讒言を信用し、道半ばにして心変わりして私に背かれたということである）。

信 「まことに」の意。同様の意味で句頭に用いる例は「九章」哀郢の「信非吾罪而棄逐兮、何日夜而忘之」。また、「九章」思美人にも「情與質信可保兮、羌居蔽而聞章」とある。

中途 道半ばにして。途中で。「中道」に同じ。「離騷」に「曰黃昏以爲期兮、羌中道而改路。初既與余成言兮、後悔遁而有他」と、「九章」抽思に「昔君與我誠言兮、曰黃昏以爲期。羌中道而回畔兮、反既有此他志」とある。「中途」は「九歎」離世に「興中途以回畔兮、駟馬驚而橫犇」という形で見えており、王逸注には「言君爲無道、國人中道倍畔而去之」とある。

## 27 懷蘭蕙與衡芷兮 蘭蕙と衡芷とを懐くも

## 28 行中壘而散之 中野に行きて之れを散ず

蘭・蕙と衡・芷とを懐いていたが、

原野に行ってこれをばら撒いて棄ててしまわれた。

[王逸注] 言己懷忠信之徳、執芬香之志、遠行中野、散而棄之。傷不見用也（言っているのは、自分は忠信の徳を懐いて、芳香の志を手にとっていたが、遠く原野に行き、ばら撒いてこれを棄てたということである。用いられないことに心を痛めているのである）。

[押韻] 叛・散。元部去声。

懷蘭蕙・衡芷 芳しい香草のような美質を有すること。蘭蕙・衡芷はいずれも香草で、作中主体の美質を喩える。作中主体が香草を「懐く」という表現の用例としては、「九歎」遠遊に

「懷蘭茝之芬芳兮、妒被離而折之」とあり、王逸注に「言己懷忠信之行、故爲衆佞所妒、欲共被離摧折而奔之也」とある。また「九歎」愍命に「懷椒聊之葭葭兮、乃逢紛以罹詬也」とあり、王逸注に「言己懷持椒聊、其香葭葭、身修行潔、動有節度、而逢亂世、遂爲讒佞所害而見恥辱也」とある。

**中野** 原野のこと。『周易』繫辭下伝に「古之葬者、厚衣之以薪、葬之**中野**」と、『史記』呂后本紀（卷九）に見える趙王友の歌に「自決**中野**兮、蒼天舉直」とある。また同書の劉敬伝（卷九十九）にも「使天下之民肝腦塗地、父子暴骨**中野**、不可勝數」と、「九思」怨上にも「擬斯兮二蹤、未知兮所投。謠吟兮**中野**、上察兮璇璣」とある。

29 聲哀哀而懷高丘兮 声 哀哀として高丘を懐い

30 心愁愁而思舊邦 心 愁愁として旧邦を思う

声は悲しげに響いて高い丘を思い、  
心は憂愁に沈んで故郷を思う。

[王逸注]言己放斥山野、發聲而唵、其音哀哀、心愁思者、念高丘之山、想歸故國也（言っているのは、自分が山野に放逐され、声を発して吟詠し、その声が悲しげであり、心が愁うのは、高丘の山を思い、故郷に帰りたいと思っているからだということである）。

**高丘** ここでは楚国にある山を指す。次句の「舊邦」と同じく作中主体の故郷を意味する。「離騷」に「忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女」とあり、王逸は「楚有高丘之山。女以喻臣。言己雖去意不能已、猶復顧念楚國、無有賢臣、心爲之悲而流涕也」と注している。「九歎」では惜賢の「望高丘而歎涕兮、悲吸吸而長懷」や、思古の「還顧高丘、泣如灑兮」などといった用例があり、いずれも作中主体の思慕の対象となっている。

**舊邦** 作中主体の故郷のこと。「九歎」にしばしば用いられる語である。離世に「余思舊邦、心依違兮」と、怨思に「歸骸舊邦、莫誰語兮」とある。

31 願承閒而自恃兮 承閒せんことを願いて自ら恃むも

32 徑淫噎而道壅 径 淫噎して道 壅がる

機会を得たいと願いつつ私は節度を保っているが、  
道は暗くなり塞がっている。

[王逸注]淫噎、闇昧也。詩云、不日有噎。言己思承君閒暇、心中自恃、冀得竭忠、而徑路闇昧、遂以壅塞（淫噎とは、暗いことである。『詩』に「陽が出ないうえに曇って風が吹く」とある。言っているのは、自分が主君の暇に乗じ（て申し開きをし）たいと思い、心中で自らを恃みな

がら、忠義を尽くすことができればと願うが、道は暗くなり、そのまま塞がれてしまったということである)。

[押韻] 邦・塵。東部平声。

**承間** 機会を捉えること。「九章」抽思に「願承間而自察兮、心震悼而不敢」とあり、王逸注に「思待清宴、自解説也。志恐動悸、心中怛也」とある。また楚辞「七諫」諷諫に「願承間而效志兮、恐犯忌而干諱」とあり、王逸注に「言己願承君閒暇之時、竭効忠言、恐犯上忌、觸衆人諱、而見刑誅也」とある。『漢書』張良伝(卷四十)に「君何不急請呂后承間爲上泣」とあり、顔師古は「承間」に対し「因空隙之時」と注する。

**自恃** 作中主体が自らの感情を抑制しているさま。「九章」悲回風に「寤從容以周流兮、聊逍遙以自恃」とあり、その王逸注に「覺立徙倚、而行歩也。且徐游戲、内自娛也」とある。当該部分について劉夢鵬『屈子楚辞章句』(崔小敬点校、上海古籍出版社、2019年、169頁)は「恃、當作「持」」とし、「自恃、自鎮其情、無令過傷之意」と解している。ここではその説に従う。

**淫暄** 日が陰っていること。双声語。ここでは作中主体が主君と隔絶していることをいう。

『古詩別解』(59頁)によれば「露暄」「陰暄」にも作る。「九弁」に「忠昭昭而願見兮、然露暄而莫達」と、洪興祖補注に「露、音陰。雲覆日也。暄、陰風也」とある。王逸注が引く『毛詩』邶風・終風に「終風且暄、不日有暄」と、毛伝に「陰而風曰暄」とある。しかし段玉裁『説文解字注』は『唐開元占經』における引用に基づき、日部「暄」字の説解を「陰而風也」から「天陰沈也」に改めているため、「暄」字は必ずしも「風」の意味を含まないようである。また「九歎」惜賢に「欲埃時於須臾兮、日陰暄其將暮」とあり、王逸は当該句と同じく「陰暄、闇昧也」と注している。

**塵** 塞がること。洪興祖は「塵、音雍」としている。王逸も「遂以壅塞」と注しているため、「塵」および「雍」の字義は「壅」と同一と考えられる。「九弁」に「願自往而徑遊兮、路壅絶而不通」と、「七諫」怨世に「專精爽以自明兮、晦冥冥而壅蔽」とある。

### 33 顔黴黧以沮敗兮 顔 黴黧にして以て沮敗す

顔は垢で黒く汚れてやつれ果て、

[王逸注] 黧、黒也。沮、壞也(黧とは、黒いことである。沮とは、壊れることである)。

**黴黧** 顔が垢で黒く汚れていること。晷韻語。楚辞「九懷」蓄英に「菀蘊兮黴黧」とあり、王逸注に「愁思蓄積、面垢黒也」とある。「黴黧」ではなく「黴黒」の例であるが、『淮南子』脩務訓に「鶴跣而不食、晝吟宵哭、面若死灰、顔色黴黒、涕液交集、以見秦王」とある。

沮敗 やぶれること。『漢書』趙充国伝（卷六十九）に「丞相御史復白遣義渠安國、竟沮敗羌」とあるように、漢代には敗北するという意味での用例が多い。後代の用例であるが、蔡邕「蟬賦」（『芸文類聚』卷九十七）に「聲嘶喑以沮敗、體枯燥以水凝」とある。

### 34 精越裂而衰耄 精 越裂して衰え耄<sup>お</sup>ゆ

精神はばらばらになって老い衰えた。

[王逸注]越、去也。裂、分也。耄、老也。言己欲進不得、中心憂愁、顔色黧黒、面目壞敗、精神越去、氣力衰老也（越とは、去ることである。裂とは、分れることである。耄とは、老いることである。言っているのは、自ら進み出ようと思ってもできず、心の内で憂愁し、顔面は垢で黒く汚れ、面貌はやつれ果て、精神は離れ去り、氣力は老い衰えたということである）。

越裂 ばらばらになること。「越」は、散じること。枚乘「七發」（『文選』卷三四）に「精神越渫、百病咸生」とあり、李善注は『呂氏春秋』の佚文である「精神勞則越」と高誘注「越、散也」とを引く。「越裂」の用例はないが、『楚辞今注』は「越裂：指精神敗散」と（336頁）、『楚辞校釈』は「越裂，暈韻字，分散兒」とする（396頁）。

### 35 裳檐檐而含風兮 裳 檐檐として風を含み

裳はゆらゆらと風ではためき、

[王逸注]檐檐、揺貌（檐檐とは、揺れる様子である）。

檐檐 衣が風ではためくさま。司馬相如「長門賦」（『文選』卷十六）に「飄風迴而起闔兮、舉帷幄之檐檐」とある。

### 36 衣納納而掩露 衣 納納として露<sup>お</sup>に掩わる

上衣はじっとりとして露に覆われている。

[王逸注]納納、濡濕貌也。上曰衣、下曰裳。言己放行山野、下裳檐檐而含疾風、上衣濡濕而掩霜露、單行獨處、身苦寒也（納納とは、濡れるさまである。上衣を「衣」といい、下衣を「裳」という。言っているのは、自分が放逐され山野へ行き、下裳はゆらゆらと疾風によってはためき、上衣はじっとりと霜や露に覆われ、一人で行動して一人で居り、身体は寒さに苦しめられるということである）。

[押韻]耄・露。魚宵合韻。去声。

納納 濡れているさま。『説文解字』糸部に「納、絲溼納納也」とある。段玉裁『説文解字注』は「納納、溼意」とし、逢紛の当該句及び王逸注を引いている。

37 赴江湘之湍流兮 江湘の湍流に赴き

38 順波湊而下降 波の湊まるに順いて下り降る

長江と湘水の逆巻く流れに赴き、  
波の集まる動きに沿って下降していく。

[王逸注]湊、聚也。言己乗船赴江湘之疾流、順聚波而下行、身危殆也（湊とは、聚まることである。言っているのは、自分は船に乗って江湘の疾流に赴き、集まる波にしたがって下り行き、身が危険にさらされているということある）。

江湘 長江と湘水。「九章」涉江に「哀南夷之莫吾知兮、且余濟乎江湘」とある。

湍流 逆巻く急流。九章「抽思」に「長瀨湍流、沂江潭兮」とあり、王逸注には「湍亦瀨也」とある。枚乘「七發」（『文選』卷三十四）に「湍流遡波、又澹淡之」とあり、李善注は「遡波、逆流之波也。澹淡、揺蕩之貌也」とする。なお『孟子』告子上篇に「性猶湍水也」とあり、趙岐注は「湍水、圜也」とする。

39 徐徘徊於山阿兮 徐ろに山阿に徘徊すれば

ゆっくりと山のくまをさまよえば、

[王逸注]阿、曲隅也（阿とは、曲隅である）。

山阿 山のくま。楚辞「九歌」山鬼に「若有人兮山之阿」とあり、王逸注に「阿、曲隅也」とある。

40 飄風來之洶洶 飄風 来たりて之れ洶洶たり

飄風がごうごうと吹いてくる。

[王逸注]洶洶、譁聲也。言己至於山之隈曲、且徐徘徊、冀想君命。飄風卒至、復聞讒佞洶洶、欲來害己也（洶洶とは、騒々しい音である。言っているのは、自分は山の入り組んだところに至り、しばらくゆっくりと歩き回りながら、（自分を呼び戻す）君命が下ることをこいねがう。飄風がにわか吹いてきて、讒言をする佞臣が騒ぎたてながら、私に危害を加えようとやってくるのが聞こえるということである）。

[押韻]降・洶。東冬合韻。平声。

飄風 つむじ風。回風に同じ。「離騷」に「飄風屯其相離兮、率雲霓而來御」とあり、王逸注に「回風爲飄。飄風、無常之風。以興邪惡之衆」とある。

洶洶 騒がしい音。「九章」悲回風に「憚涌湍之礚礚兮、聽波聲之洶洶」とある。揚雄「羽獵賦」（『文選』卷八）に「虓虎之陳、從橫膠輻、森拉雷厲、驥駢駘礚、洶洶旭旭、天動地吸」とあり、李善注には「洶洶、旭旭、鼓動之聲也」とある。



#### 41 馳余車兮玄石 余が車を玄石に馳せしめ

私の車を玄石山に走らせ、

[王逸注]玄石、山名（玄石とは、山の名である）。

玄石 山名。同時代の文献に山名としての用例は見られないが、次句の「洞庭」と対になっているため、山名もしくは地名とみるべきであろう。

余車 作中主体が乗る車。「九章」涉江に「步余馬兮山舉、邸余車兮方林」とあり、「九歎」思古に「還余車於南郢兮、復往軌於初古」とある。

#### 42 步余馬兮洞庭 余が馬を洞庭に歩ましむ

私の馬を洞庭湖のほとりに歩ませる。

[王逸注]洞庭、水名（洞庭とは、湖の名である）。

余馬 作中主体が移動に用いる馬。「離騷」に「步余馬於蘭皋兮、馳椒丘且焉止息」とあり、「九懷」危峻に「步余馬兮飛柱」とある。41・42のように作中主体が馬や車で移動するさまをいう表現は「九章」涉江の「步余馬兮山舉、邸余車兮方林」を踏まえたものか。

洞庭 洞庭湖。洪興祖補注は「謂洞庭之山」といい、『山海經』中山経にも「又東南一百二十里曰洞庭之山」とあるが、ここでは洞庭湖のほとりを移動することとして解する。「九歌」湘君に「駕飛龍兮北征、遭吾道兮洞庭」とあり、王逸注に「洞庭、太湖也」とある。「九章」哀郢にも「將運舟而下浮兮、上洞庭而下江」とある。

#### 43 平明發兮蒼梧 平明に蒼梧を發し

#### 44 夕投宿兮石城 夕べに石城に投宿す

夜明けに蒼梧を出発し、

夕暮れには石城山に宿を定める。

[王逸注]石城、山名也。言己動履大水、宿止名山、用志清潔且堅固也（石城とは、山の名である。言っているのは、私が移動するときに大きな湖のほとりを行き、名山に宿を定めるのは、心の持ちようが清潔かつ堅固であるからだということである）。

[押韻]庭・城。耕部平声。

蒼梧 帝舜が葬られた地。「離騷」に「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃」とあり、王逸注に「蒼梧、舜所葬也」とある。『礼記』檀弓上「舜葬于蒼梧之野」の鄭玄注に「舜征有苗而死。因留葬焉。……蒼梧、於周南越之地。今爲郡」とあり、『史記』五帝本紀には舜の崩御について「踐帝位三十九年、南巡狩、崩於蒼梧之野」と記す。

**石城** 山名。具体的な場所は特定できないものの、楚地域に「石城」という地名あるいは山名があったことを示す資料が複数存在する。『淮南子』人間訓に「江水之始出於岷山也、可攬衣而越也。及至其下洞庭、驚石城、經丹徒、起波濤、舟杭一日不能濟也」とあり、許慎注に「洞庭在長沙、石城在丹陽」とある。また『史記』魏世家「伐楚、道涉谷、行三千里」の劉伯莊の注に「秦兵向楚有兩道。涉谷是西道、河外是東道。從褒斜入梁州。即東南至申州攻石城山險阨之塞也」とある。直後の部分「而攻冥阨之塞」の『史記正義』に引く『括地志』には「石城山在申州鍾山縣東南二十一里。魏攻冥阨即此。山上有故石城」とある。

45 芙蓉蓋而菱華車兮 芙蓉の蓋に菱華の車

46 紫貝闕而玉堂 紫貝の闕に玉の堂

蓮花の車蓋に菱花の車、  
紫貝の宮門に玉石のお堂。

[王逸注]紫貝、水蟲名。『援神契』曰、江水出大貝也（紫貝とは、水中生物の名である。『援神契』に、「江水から大貝が出る」とある）。

**芙蓉蓋** 蓮の花でできた車蓋。「離騷」に「製芰荷以爲衣兮、集芙蓉以爲裳」とあり、王逸注に「芙蓉、蓮華也」とある。以下 48 までには「九歌」の影響が認められる。蓮の車蓋が楚辞作品で用いられている例としては、「九歌」河伯の「乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮騶螭」がある。

**菱華** 菱の花。「芙蓉」と対になっている例では、司馬相如「子虛賦」（『文選』卷七）の「外發芙蓉菱華、内隱鉅石白沙」などがある。

**紫貝闕** 紫貝で飾った宮殿、あるいは門。「九歌」河伯に「魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮朱宮」とある。また、司馬相如「子虛賦」（『史記』司馬相如伝）に「張翠帷、建羽蓋。罔瑋瑁、鈞紫貝」とあり、『史記集解』は「郭璞曰、紫質黒文也」とし、『史記正義』は『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』を引き「其白質如玉、紫點爲文、皆成行列當。大者徑一尺、小者七八寸。今九真・交趾爲杯盤。實物也」という。

47 薜荔飾而陸離薦兮 薜荔の飾に陸離たる薦

薜荔の飾りにきらきらとした筵、

[王逸注]陸離、美玉也。薦、臥席也（陸離とは、美しい玉のことである。薦とは、横になるための敷物のことである）。

**薜荔** 植物の一種。「離騷」に「擘木根以結菝兮、貫薜荔之落蕊」とあり、その王逸注には「薜荔、香草也。緣木而生」とある。また、「九歌」湘夫人に「罔薜荔兮爲帷、擗蕙櫨兮既張」とあり、揚雄「甘泉賦」（『文選』卷七）に「靡薜荔而爲席兮、折瓊枝以爲芳」とある。

陸離 きらびやかなさま。双声語。「離騷」に「高余冠之岌岌兮、長余佩之陸離」とあり、その王逸注には「陸離、猶參差衆貌也」と、同じく「離騷」に「紛總總其離合兮、斑陸離其上下」とあり、王逸注は「陸離、分散也」とある。『淮南子』本經訓に「乃至夏屋宮駕、縣聯房植、椽檐椽題、雕琢刻鏤、喬枝菱阿、夫容芰荷、五采爭勝、流漫陸離」とあり、高誘注に「陸離、美好貌」とある。

#### 48 魚鱗衣而白蜺裳 魚鱗の衣に白蜺の裳

魚鱗の衣に白い虹の裳。

[王逸注]魚鱗衣、雜五綵爲衣、如鱗文也。言所居清潔、被服芬芳、德體如玉、文綵耀明也（魚鱗の衣とは、色とりどりの絹で作られた衣が、鱗のような文様となっていることをいう。言っているのは、清潔な所におり、芳ばしい香りの服を着て、その徳ある身体は玉のようで、綺麗な服のように耀いているということである）。

[押韻]堂・裳。陽部平声。

魚鱗衣 魚の鱗でできた衣。「九歌」河伯に、「魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮朱宮」とある。

白蜺裳 白い副虹の裳。「九歌」東君に、「青雲衣兮白霓裳、舉長矢兮射天狼」とある。

#### 49 登逢龍而下隕兮 逢龍に登りて下り隕ち

高みに登ったが落ちてしまい、

[王逸注]逢龍、山名（逢龍とは、山名である）。

逢龍 高いさまを表すオノマトペ。黄靈庚『楚辞章句疏証』（上海古籍出版社、2018年、2690 - 2691頁）は「逢龍、猶豐隆。其字無定體、言高峻貌」といい、高く険しいさまを「逢龍」とする可能性を指摘している。ここではその説に従った。「豐隆」を高く険しいさまを表す語として用いたものとしては、後代の例ではあるが、南朝梁の蕭子範「建安城門峽賦」（『芸文類聚』巻六）に「瓌詭豐隆、質狀不同、班黃糅采、玄紫潛通」とある。なお、王逸注が言うように山名である可能性について、黄氏は『三国志』魏志「臧覇伝」（巻十八）の「當遣兵逆覇、覇與戰於逢龍、當復遣兵邀覇於夾石、與戰破之、還屯舒」や吳志「周魴伝」（巻六十）「前彭綺時、聞旌塵在逢龍。此郡民大小歡喜、並思立効」を引き「逢龍山、在盧江郡吳塘陂也」とするが、当該句の「逢龍」については「逢龍之山、未詳其處」とする。

隕 落ちること。『楚辞今注』は「下隕：下落、謂下山」とするが（336頁）、楚辞作品の中に「隕」を下山の動作として用いる例は見当たらない。『説文解字』自部には「隕、從高下也」とあり、これに従えば下山の動作と捉えることもできる。しかし『説文解字』も引く『周易』

姤卦・九五に「有隕自天」とあるように、「隕」は、高所から落下するさまに用いられることが多いため、ここでは落ちる動作として解釈した。

### 50 違故都之漫漫 故都を違ること之れ漫漫たり

古い都からはるか遠く離れてしまった。

[王逸注]言己登逢龍之山而遂下顧、去楚國之遼遠也（言っているのは、自分が逢竜の山に登ってそのまま下って顧みれば、楚からはるか遠く離れてしまったということである）。

違 離れること。『毛詩』邶風・谷風に「行道遲遲、中心有違」とあり、毛伝に「違、離也」とある。また「九歎」思古に「違郢都之舊閭兮、回湘沅而遠遷」とあり、王逸注に「言己放逐、去我郢都故閭、回於湘沅之水而遠移徙、失其所之也」とある。

漫漫 はるか遠いさま。「離騷」に「路曼曼其修遠兮、吾將上下而求索」とあり、王逸注に、「言天地廣大、其路漫漫遠而且長、不可卒至。吾方上下左右、以求索賢人、與己合志者也」とある。「九歎」憂苦に「登嶺岨以長企兮、望南郢而闕之。山脩遠其遼遠兮、塗漫漫其無時」とあるのと同様に、ある場所から見たときに、故郷がはるか遠くに見えることを表現していると思われる。

### 51 思南郢之舊俗兮 南郢の旧俗を思えば

### 52 腸一夕而九運 腸は一夕にして九たび運る

南郢の古い習俗を思えば、

(悲しみのあまり)腸が一晩で幾たびもねじれるようだ。

[王逸注]言己思念郢都邑里故俗、腸中愁悴、一夕九轉、欲還歸也（言っているのは、自分が故郷である郢都の古い習俗のことを思い出せば、腸のうちは憂えて、一晩で何度もねじれるほどであり、帰りたいと願うということである）。

[押韻]漫・運。真元合韻。去声。

南郢 楚の都。「九歎」遠游に「見南郢之流風兮、殞余躬於沅湘」とあり、王逸注に「言還見楚國風俗、妒害賢良。故自沈於沅湘、而不悔也」とある。「九歌」の王逸序に「九歌者、屈原之所作也。昔楚國南郢之邑、沅湘之間、其俗信鬼而好祠」とある。以上の二例では「南郢」の正確な位置はわからないが、『春秋公羊伝』宣公十二年に「南郢之與鄭相去數千里」とあり、何休注に「南郢、楚都」とある。また延熹三年（160年）に建てられたとされる「楚相孫叔敖碑」には、「楚都、南郢。南郢、即南郡江陵縣也」（『石刻史料新編』所収『隸釈』巻三、新文豊出版、1977年）とある。

**舊俗** 古い習俗。『毛詩』大序に「國史明乎得失之迹、傷人倫之廢、哀刑政之苛、吟詠情性以風其上、達於事變而懷其舊俗者也」とある。

**腸一夕而九迴** 腸がねじれるような悲しみ・苦しみを表す慣用表現。「九懷」昭世に「魂悽愴兮感哀、腸回兮盤紆」とある。「一夕」と「九」を用いる例は、「九章」抽思の「惟郢路之遼遠兮、覓一夕而九逝」がある。また、司馬遷「報任少卿書」（『文選』卷四十一）に「是以腸一日而九迴、居則忽忽、若有所亡、出則不知其所往」とある。

### 53 揚流波之潢潢兮 流波の潢潢たるを揚げ

波は高く果てしなく上がり、

[王逸注]潢潢、大貌（潢潢とは、大きいさまである）。

**流波** 川の水が立てる波のこと。「遠遊」に「叛陸離其上下兮、遊驚霧之流波」とあり、王逸注に「蹈履雲氣、浮游清波也」とある。また、宋玉「神女賦」（『文選』卷十九）に「望余帷而延視兮、若流波之將瀾」とあり、李善注に「流波、目視貌。言舉目延視、精若水波將成瀾也」とある。なお、後代の例ではあるが、王粲「七哀詩」其二（『文選』卷二十三）に「流波激清響、猴猿臨岸吟」という形で川が流れるさまが表現されている。

**潢潢** 川の流れが広大なさま。洪興祖補注は「水深廣貌」とする。また、『広雅』釈詁（卷六上）に「潢潢、浩盪也」とある。楚辞「九歎」遠逝に「赴陽侯之潢洋兮、下石瀨而登洲」とあり、王逸注に「言己願乘盛波、逐湘江之流、赴陽侯之大波、過石瀨之湍、登水中之洲、身歷危殆、不遑安處也」とある。司馬相如「上林賦」（『文選』卷八）に「然後灑灑潢潢、安翔徐徊、翫乎滄滄、東注太湖、衍溢陂池」とあり、「灑灑潢潢」の李善注が引く郭璞注に「皆水无涯際貌」とある。

### 54 體溶溶而東回 体 溶溶として東のかた回る

我が身は広々とした流れに押され東に向かう。

[王逸注]溶溶、波貌也。言己隨流而行、水盛廣大、波高溶溶、將東入於海也（溶溶とは、波の様子である。言っているのは、自分が流れに随って移動すると、水の勢いが盛んで広大であり、波が高く大きく、東方の海に入ろうとするということである）。

**溶溶** 波の広大なさま。『説文解字』水部に「溶、水盛也」とある。「九歎」愍命に「心溶溶其不可量兮、情澹澹其若淵」とあり、王逸注に「溶溶、廣大貌。澹澹、不動貌也。言己之心智謀溶溶、廣大如川、不可度量、情意深奥、澹澹若淵、不可妄動」とある。ここでは後者に従って解した。

東回 東に向かい海まで流されていくこと。『楚辭今注』は「指順流東下」とする(336頁)。楚辭作品のうち、東方に流れて海に至るという表現としては「七諫」沈江の「赴湘沅之流澌兮、恐逐波而復東」があり、王逸注には「言己心清潔、不能久居濁世、故赴湘沅之水、與流澌俱浮、恐遂乘波而東入大海也」とある。

55 心悵悵以永思兮                      心 悵悵として以て永く思い

56 意唵唵而日頹                      意 唵唵として日ひ頹<sup>くず</sup>る

私の心は望みを失って物思いに沈み続け、

心は暗くなり日ごとに(沈む太陽のように)落ちていく。

[王逸注]言己將至於海、心中悵悵而長思、意唵唵而稍下、恐不復還也(言っているのは、自分が今にも海に至ろうとし、心が望みを失って物思いを続け、気持ちが暗くなって徐々に落ち込んでいき、二度と帰ることができないことを恐れるということである)。

[押韻]回・頹。脂部平声。

悵悵 「惆悵」と同じく失意のさま。「九弁」に「惆悵兮而私自憐」とあり、また「心搖悅而日昏兮、然悵悵而無冀」とある。後者の王逸注に「意中私喜、想用施也。内無所恃、失本義也」とある。

唵唵 暗いさま。『説文解字』日部に「唵、不明也」とある。漢代の辞賦では太陽の光についていうことが多い。「九歎」惜賢に「孰契契而委棟兮、日唵唵而下頹」とあり、王逸注に「言誰有契契憂國念君、欲委其梁棟之謀若己者乎。然日頹暮、傷不得行也」とある。また班彪「北征賦」(『文選』卷九)に「日唵唵其將暮兮、覩牛羊之下來」とある。

頹 落ちること。「九歎」遠逝に「日杳杳以西頹兮、路長遠而窘迫」と、惜賢に「孰契契而委棟兮、日唵唵而下頹」とあるように、太陽が沈むさまをいうことが多い。しかし類似作である陸雲「九愍」悲郢(『陸士龍文集』卷七)に「撫形容之日頹、悵炯思而弗及」とあるのに鑑みて、ここでは作中主体が「意」すなわち心を落とすこととして解した。

57 白露紛且塗塗兮                      白露 紛として以て塗塗たり

白露はしとどに降り、

[王逸注]塗塗、厚貌(塗塗とは、厚いさまである)。

白露 秋に降る白い露。「九弁」に「秋既先戒以白露兮、冬又申之以嚴霜」とある。

紛 盛んなさま。「離騷」に「紛吾既有此内美兮」とあり、その王逸注に「紛、盛貌」とある。

「九章」涉江に「霰雪紛其無垠兮、雲霏霏而承宇」とある。

塗塗 厚くたっぷりとしたさま。謝朓「酬王晋安」（『文選』卷二十六）に「梢梢枝早勁、塗塗露晚晞」とあり、李善注は逢紛の当該句と王逸注を引く。

58 秋風瀏呂蕭蕭 秋風 瀏として以て蕭蕭たり

秋風はさわさわと吹く。

[王逸注]瀏、風疾貌也。言四時欲盡、白露已降、秋風急疾、年歲且老、愁憂思也(瀏とは、風が速いさまである。言っているのは、季節が一回りしようとし、すでに白露が降りはじめ、秋風は激しく、年老いようとしているため、憂えているということである)。

瀏 風の吹くさま。馬融「長笛賦」（『文選』卷十八）には「霏叩鍛之岌岌兮、正瀏溼以風冽」とあり、風が吹くことを指している。また、潘岳「寡婦賦」（『文選』卷十六）に「雪霏霏而驟落兮、風瀏瀏而夙興」とあり、李善注は逢紛の当該句と王逸注を引く。

蕭蕭 風が吹く音を表すオノマトペ。「九歌」山鬼に「風颯颯兮木蕭蕭、思公子兮徒離憂」とあり、「九懷」蓄英に「秋風兮蕭蕭、舒芳兮振條」とある。

59 身永流而不還兮 身 永く流れて還らず

60 魂長逝而常愁 魂 長く逝きて常に愁う

体はいつまでも流れていつて帰らず、

魂は長<sup>とこし</sup>えに離れて憂え続けている。

[王逸注]言己身隨水長流、不復旋反、則魂遂去、常愁念楚國也（言っているのは、我が身は水に従っていつまでも流れ続け、再び帰ることができないため、魂魄は身体から離れて、常に憂えて楚國を思っているということである）。

[押韻]蕭・愁。幽部平声。

長逝<sup>とこし</sup> 長えに離れること。司馬遷「報任少卿書」（『漢書』卷六十二、司馬遷伝）には「是僕終已不得舒憤懣以曉左右、則長逝者魂魄私恨無窮」とあり、死ぬことを指す。楚辞作品のうち「魂」に対して「逝」という字を使う例は、「九章」抽思に「惟郢路之遼遠兮、魂一夕而九逝」とあり、故郷を思って魂が離れていくことをいう。ここでは死ぬことと解する。

61 歎曰譬彼流水 歎きて曰く、譬うれば彼の流水のごとく

62 紛揚礧兮 紛として揚がりて礧たり

63 波逢洶涌 波 逢として洶涌

64 瀆滂沛兮 瀆として滂沛たり

歎いていう、たとえばあの流水のように、

乱れて揚がって石にぶつかる音がする。

波が盛んに跳ね上げられ、

まっすぐにどっと湧き上がる。

[王逸注]水性清潔平正、順而不争。故以喻屈原也。言水逢風紛亂、揚波滂沛、失其本性。以言屈原志行清白、遭逢貪佞、被過放逐、亦失其本志也（水の性は清潔で平らかで正しく、順って争わない。ゆえにそれで屈原を喩えるのである。言っているのは、水が風に逢って乱れ、波を揚げて溢れ、その本性を失うということである。それで屈原の志と行いは潔白であるのに、貪婪でへつらう者たちに出くわし、咎めを受けて放逐され、（水のように彼も）またその本来の志を失ってしまったことをいうのである。

[押韻] 磕・沛 祭部。

**磕** 石がぶつかる音。「磕」にも作る。『説文解字』石部に「磕、石聲。從石、盍聲」とある。また、司馬相如「子虚賦」（『文選』巻七）に「礪石相擊、礪礪磕磕」とある。楚辞作品の用例には「九章」悲回風の「憚涌湍之磕磕兮、聽波聲之洶洶」などがある。

**逢** 波が盛んなさま。『墨子』耕柱に「逢逢白雲、一南一北、一西一東」とあり、孫詒讓『墨子間詁』では「逢」は「蓬」に通ずるとして、『毛詩』小雅「采菽」の「維柞之枝、其葉蓬蓬」に付された毛伝「蓬蓬、盛貌」、『莊子』秋水篇の「蛇謂風曰、予動吾脊脅而行、則有似也。今子蓬蓬然起於北海、蓬蓬然入於南海、而似無有、何也」を引く。

**洶涌** 跳ね上がること。暈韻語。司馬相如「上林賦」（『文選』巻八）に「洶涌澎湃」とあり、李善注が引く司馬彪注に「洶涌、跳起也。澎湃、波相戾也」とある。

**瀆** 水がまっすぐに吹き上がること。『春秋公羊伝』昭公五年に「戊辰、叔弓帥師。敗莒師于瀆泉。瀆泉者何。直泉也。直泉者何。涌泉也」と、徐彦の疏に「謂此泉直上而出」とある。

**滂沛** 水量が多いさま。双声語。揚雄「甘泉賦」（『文選』巻七）に「雲飛揚兮雨滂沛」とある。左思「吳都賦」（『文選』巻五）に「包暘谷之滂沛」とあり、李周翰注に「滂沛、水多貌」とある。

65 揄揚滌盪

揄揚滌盪し

66 飄流隕往

飄として流れて隕<sup>お</sup>ち往き

67 觸崙石兮

崙石<sup>ふ</sup>に触る

（わが身は）水に揺り動かされて揉まれ、  
流れて下っていき、  
尖った岩にぶつかる。



[王逸注] 峯、銳也。言風揄揚、水流隕往、觸銳利之石、使之危殆。以言讒人亦揚己過、使得罪罰也（峯とは、鋭いことである。言っているのは、風が吹き上がって、水の流れが下流に向かい、鋭い石に触れて、水を危険にさらすということである。これによって讒人もまた私の過ちをあげつらい、とがめを受けさせることをいう）。

[押韻] 盪・往。陽部平声。

**揄揚** 水が揺れ動いて波を立てるさま。双声語。『説文解字』手部に「揄、引也」とある。

「揄揚」そのままの用例ではないが、「九歎」惜賢にも水の様子を「江湘油油、長流汨兮。挑揄揚汰、盪迅疾兮」と表現した例がある。「揄」も「揚」も波が上がるさまであろう。

**滌盪** 水が物を洗うさま。『説文解字』水部に「滌、洒也」と、皿部に「盪、滌器也」とある。『漢書』李尋伝（巻七十五）に「得道不得行、咎殃且亡、不有洪水將出、災火且起、滌盪民人」とある。ここでは水の流れが激しいさまの形容と解した。

**峯石** 尖った岩。洪興祖は「峯、一作岑……山小而鋭」とする。また、『説文解字』山部には「峯、山之岑峯也」とある。楚辞「招隠士」に「狀兒崢嶸兮峨峨」とある。揚雄「羽獵賦」（『文選』巻八）には「玉石巒峯、眩耀青熒」とあり、『漢書』揚雄伝上（巻八十七）に引かれる同賦の顔師古注には「巒峯、高銳貌」とある。

68 龍邛將圜

竜邛將圜

69 繚戾宛轉

繚戾宛転して

70 阻相薄兮

阻に相い<sup>せま</sup>薄る

流れは波打ち曲がりくねって、  
くねくねとしてぐるぐる渦巻き、  
険しい場所に近づいていく。

[王逸注] 言水得風則龍邛繚戾、與險阻相薄、不得順其流性也。以言忠臣逢讒人、亦匡攘惶遽而竄伏也（言っているのは、水が風を受けるとぶつかりあってくねくねとして、険しいところに近づき、水が（下に）流れるという本性に従うことができないということである。これによって忠臣も讒言を行う者に遭遇すると、恐れをなして逃げ隠れるということを用いる）。

[押韻] 圜・転。元部上声。石・薄。鐸部入声。

**龍邛** 隆起するさま。黄靈庚『楚辞章句疏証』は「龍邛、「穹隆」之倒文、水波弧圓貌」とする（2697頁）。司馬相如「上林賦」（『文選』巻八）に「滂澗沆漑、穹隆雲橈」とあり、李善注が引く郭璞注に「穹隆、隴起回窟也」とある。また「隆穹」の用例としては、馬融「広成頌」

(『後漢書』卷六十、馬融伝上)の「金山・石林、殷起乎其中、峨峨磴磴、鏘鏘唯唯、隆穹槃回、岨峿錯崔」がある。

**脗** 曲がりくねるさま。『説文解字』肉部に「脗、脅肉也」とあり、段注に「九歎説流水、龍印脗圈、繚戾宛轉。脗、一作綸」とある。「綸」については『爾雅』積詁下「貉・縮、綸也」の郭璞注に「綸者、繩也。謂牽縛縮貉之。今俗語亦然」とある。繩の巻き付くさまから転じて曲がりくねるさまの形容に用いたか。司馬相如「子虚賦」(『文選』卷七)に「不若大王終日馳騁、曾不下輿、脗割輪焮、自以爲娛」とあり、李善注に「脗、音鬱」とある。『莊子』在有篇に「天下將不安其性命之情、之八者、乃始鬱卷滄囊而亂天下也」とあり、『經典積文』卷二十七に「司馬云、鬱卷、不申舒之狀也」とある。

**繚戾** ねじ曲がるさま。「繚」は『説文解字』糸部に「繚、纏也」とあり、「戾」は同じく『説文解字』犬部に「戾、曲也。从犬出戸下。爲戾者、身曲戾也」とある。「九弁」に「心繚悞而有哀」とあり、王逸注に「思念糾戾、腸折摧也」とある。

**宛轉** ぐるぐると渦を巻くこと。回転する動きを表す語。楚辭「哀時命」に「愁脩夜而宛轉兮、氣洶濤其若波」とあり、王逸注に「言己心憂宛轉而不能卧、愁夜之長、氣爲洶濤、若水之波也」とある。また、後代の用例ではあるが、王延寿「魯靈光殿賦」(『文選』卷十一)に「白鹿子蛻於構榼、蟠螭宛轉而承楣」とある。

**相薄** 近づき迫ること。『漢書』晁錯伝(卷四十九)に「曲道相伏、險阨相薄、此劍楯之地也。弓弩三不當一」とある。

71 遭逢紛凶 紛に遭い凶に逢い

72 蹇離尤兮 蹇 尤に離う

乱世や災いに出会い、

ああ、咎を得てしまった。

[王逸注]言己遭逢紛濁之世、而遇百凶、以蹇蹇之故、遂以得過也(言っているのは、自分が乱れ濁った世の中に遭遇して、多くの災いに遭い、忠直なために、罪を得たということである)。

**蹇** 感嘆詞。「九歌」湘君に「君不行兮夷猶、蹇誰留兮中洲」とあり、「七諫」諷諫に「心怵憚而煩冤兮、蹇超搖而無冀」とあり、いずれも王逸注に「蹇、詞(辭)也」とある。

**離尤** 咎に遭うこと。「九章」惜誦に「欲儻個以干僚兮、恐重患而離尤」とあり、王逸注に「尤、過也」とある。また「九歎」怨思に「背玉門以犇驚兮、蹇離尤而干詬」とある。

73 垂文揚采 文を垂れ采を揚げ

74 遺將來兮 將來に遺る

巧みな文章を綴り上げて、  
後世に遺す。

[王逸注]言己雖不得施行道德、將垂典雅之文、揚美藻之采、以遺將來賢君、使知己志也（言っているのは、自分は道德を施すことができなかつたが、典雅な文章を後世に残し、美しい巧みさを表し、それを未来の賢君に送って、自らの志を知らしめようとするということである）。

[押韻]尤・來。之部平声。

**將來** 後世のこと。揚雄「長楊賦」（『文選』卷九）に「延光于將來、比榮乎往號」とある。